押切順三

押切順三（おしきりじゅんぞう）　一九一二年秋田県雄勝郡横堀町（現雄勝町）に生まれて、横手中学校を卒業、東京の産業組合学校を経て産業組合中央会秋田支会に勤務。一九四〇年第一回の召集。一九四二年再召集、中国に行き山西省で敗戦を迎え、一九四六年帰国。秋田県農協に勤務して今日に至り、なお秋田県農村医学会事務局長を兼ねる。

一九五〇年、北本哲三らと詩誌『処女地帯』（第二次）を刊行、農村的詩人集団として注目され、一九七四年一〇月に第六〇号を出したが、ほとんどその編集に当った。第二次の『コスモス』に登場、現在もその同人。詩風は内面のリアリズムを基調として寡黙重厚、東北の風雪に耐ゆるかのような趣きがある。処女詩集『大監獄』以下『斜杭』『沈丁花』があり、豆本詩集『祝婚歌』もある。戦前戦後を通じて力量あるアナキスト詩人の一人である。日本アナキスト連盟に属し、機関紙『自由連合』等にも詩を発表していた。

上山部落

かつてそこにはなだかい廟宇があった。
いまは鳥さえとばない。

ふたつの国の兵隊が
かけのぼっては死に
かけおりては死に
なもしれぬ雑草に埋れた。

冷い日は霧や雲にかこまれる頂点であった。
晴れた日はいく十となく村々を数えることができた。

はるかとおくとおく
けむりの見えるのは汽車であるらしい。

夜となって、
星よりもはかなくともってみえるのは
ずっとむこうのまちの灯であるらしい。

おみなえし

美栄部落 台地のはじに二十戸。
開設昭和十二年
やがては、やがてはと暮して十五年。

それぞれにいけがきなど生え繁り
サナシは枝もたわわにいま実をつけている。
きょう ケーブル埋設作業は休み、
このひまに稲を刈る。
病気どりの羽みたいにぼやぼやたっている稲。
たでの花に似た穂。

刈って刈って、刈っても
ひとにぎりにならぬ稲。

いつしか雨となる。
けぶるようにふりしきる秋の雨。
ときおり、どっと杉林をたたいて落ちる豪雨。

反収一石にもなるまい。

てんてん、稲にまじっておみなえしが咲いている。
たけたかく黄いろい花がういている。
刈りあとにも
てんてん
おみなえしの花。

稗ぬき

砂丘に入りこんだ田四枚。
しめて三反四畝。
一反田一枚、そこから稗ぬきをはじめる。

わけ入る穂並のあまりのかるさ。
反収二石三斗も切れるかも知れぬ。
八月十九日の晩。二十日の朝から一日いっぱい、
キアレン台風。
その潮風にいたみつけられた稲たち。

ぬいてもぬいても
目の先にういてくる稗の穂。

今年の米価石当り七、五〇〇円、玄米三等。
超過供出奨励金石当り二、五〇〇円。
自田販売政府買入価格石当り一〇、五〇〇円。

石当り四等米七、三五〇円。
収量甘くみて七石五斗。

目の先に目の先にういてくる稗の穂。
あれやこれやと思う。
うまい仕組みと思う。

農民のみなさん。
ひと声たたきおとして
はしりすぎる選挙トラック。

国道は砂丘をまわって
ゆききする車も多い。

次の稗をぬく。
五尺ゆたかな根の張った奴。
その稗をぬく。

無人の村

私のノート・花岡事件

山狩りの一隊は必死のおもいだった。
〝敵の退路を遮断せよ〟その号令におびえながら、
竹ヤリと日本刀をかついで山に向った。

捕えたのは一人の〝敵〟であった。
やせこけた男は目をつぶってじっとしていた。

山狩りは終った。
その一人の捕虜は
手足をしばられ一本棒につるされてはこばれた。
富士の巻狩りの絵にある

あのいのししみたいにだ。

部落の兵卒たちは棒をかついで山をおりた。
うす目をあけておれを見ている、と
部落の兵卒はしきりに棒かつぎを交代した。
親方衆は威勢よく刀をならしては
狸汁だ、狸汁だ、とわめいた。

部落から県道に出て
彼はトラックに積みこまれリンチ場にはこばれた。

一九四五年、夏のことである。

彼を、李といったか王といったか、
誰もその名を知らない。

また、殺された三〇〇人余の中に彼がはいっていたか、
それとも新しい中国に帰ったか、
それも誰も知らない、
誰も語らない。

あれからもう十二年にもなる。
口をぬぐっているみたい、

そして、
物語りに飢えているみたい、
七月の村は森閑としている。

かわいそうな僕

立ちはい　あるいはわらじしめと称して
門口で酒をのませるのが、この地方のならわしだ。
もう門出だ、みんなさようなら、
僕は立ちあがって
なみなみとつがれた盃をあおった
しまった、酒はこぼれて僕の胸をぬらした。
酒は、つめたく胸から腹に伝わった。
人々は顔をそむけている。
見るな、不甲斐のない、酒をこぼしたこの男を見るな、
見るな、かわいそうなこの息子を見るな、
いま僕はこの家を出てゆく、
うすぎたないこの旗はなんだ、

口々になにかをいっているこの人の集りはなんだ、
酒は、つめたくつめたく
かわいそうな僕の胸から腹をぬらしてゆく。

旗をふらず、歌をうたわず
僕は出発した。
風景は移った、
死が、僕のそばまできた。
ずいぶんながいあいだ
僕はあるきつづけた。
酒はつめたく、
胸から腹をぬらしている。
いまでもそうだ。
戦争だって、権力だって、銃剣だって、
かわいそうな僕を傷つけることができるもんか。

勲章

高橋三吉・二十四歳
農、一子あり、第二乙種　補充兵
影がうすくなった写真が欄間にある
軍帽の、歯が白く笑った写真だ、
貫通銃創　即死、

体をのり出したとき弾は胸を貫いた
胸のまん中を弾は通った
ほんの小さな傷あとだが
背中は大きくただれていた
駐屯地にかついできて焼いた
長い夜であった、

むかしむかしのことになった
勲八等瑞宝章
チンチン仏前の鐘を鳴らす
冷えびえとした仏間
雪から突き出た枯れ葦、
—斜面 二、三間うしろにすっとび
　そのまま谷までころがり落ちる
勲八等瑞宝章
八角の白銀、
燃え続けた臓器の白い炎、
人けのない部落をぬけて国道に出る
舗装路の上を
雪が舞って舞って。

斜坑

落下しているのではない
次第に私は地に潜ってゆく、
地の底に、
落下ではない
ほら、三角定規の
地表を水平に
縦の直角の線
斜めの一辺をだ、
その斜坑を
私を辿ってゆく、
ある点までだ。

地上には
風景があって、植物群があって
サルビヤが赤く、
秋であった、
斜坑は一本の線となって
その下を走っていた。

たしかに存在する点がある、
黒鉱、非鉄金属鉱の肌に
やがて私はふれるだろう、
斜坑、
暗く湿っぽいあなだ、
たしかな目あてがあるが
ただ私は墜ちてゆくのか、
まっすぐに

一本の線を辿って、

大鉱床、
沈澱と凝固の果ての
この大きなかたまり
巨大なだけのむなしさに
なぜ私は向ってゆくのか、
空気は次第に重くなる
私の意識に
モグラあなみたいな地の底が光っておる、

斜めに日が

ひろい大陸のことだから
どこのどいつが死んだって
たいしたことでないだろうが、
ゴマをまいたような点
ひとつ、ふたつ、そいつがひろがる。
死んだってたいしたこともない
あまされもの、よたもん
おかしな国のかわいそうなやつらだ。
東京・朝鮮ライン、グアム島からオキナワ
あとはおきまりのベトナム
泥だらけ、血まみれ　O God
なぜ死ぬんだ、

そんなこと考えぬことだ。
でもなぜ、
死んでかえったやつらにきいてくれ、

やっと着いたところだ、
バス・ターミナルの荷物おき場の上に
ちょこんとのっかっている草色の袋がそれだ。
遠い遠い国から
かえってきた、
ターミナルはいま夕刻
ひと、ひとりっこいない時間
斜めに日射しをあびている
草いろの袋があいつだ。
斜めに日が
長い長い影、

野原のはての
夜の底でおふくろだけが泣く
運の悪いこどもだ、O God.
袋の底からチャラチャラ出るのは
東洋のコイン
銅の、アルミの
一枚・二枚……
にぶく光る、
魂みたいにだ。
魂と話しして
おふくろだけが泣く、

ナスビ色のなかで

厚い雪雲の一角が切れて
斜めに陽がさしている、
そんな夕ぐれ
闇に移る直前
天地は濃いナスビ色に染まる。
ほんに短かい時間だが
したたりおちそうなナスビ色、
カラスも木も村も 水も雪も
人も
濃いナスビ色につつまれる、
くらやみではない
ナスビ色のひかりだ。

この時、人は急ぐ
気圧の底を急ぐ、
血が光って見える時刻だ、
この薄暮とくらやみの間に
なぜ物のりんかくが、こう浮きでるのか、
僕も急ぐ
村の道を急ぐ
村の酒場にむかう、
闇になる前に酒をのもう、
ナスビ色のなかを僕は酒場に走る。
この明るさ、
気圧の底でのこの人いきれ、
ナスビ色はすでに地に沈んだ、
僕はテーブルをたたいて叫ぶ
濃くて冷い酒をくれ。

重たい草

一九五九年七月二七日、月曜
〔草の重みで老婆窒息死〕

黒い森につながるみち、
鳥のひくくとぶむら。

〔農イノさん（六九）は、朝草を刈りに行ったまま帰らず〕

七十年の土が息のねをとめる。
虫たちがその上で舞う、
水と草のしとね。

〔たんぼに突っこんで死んでいるのを家人が発見〕

野には無数の花。
背の草にも花。
緑と藍の気圧の下で
霧は鳴らすオルガン。

〔草の重みで起きあがれず〕

青い世界、ぬれている国。
小鳥のように呟く声。
重い草、
重たかった草、
さらにどっしりとした露。

〔窒息死したらしい〕

重い、
重い、
重みで押すな。
押すな。

とむらいの日に

とむらいの席にすわって
言葉もなく私は酒をのんでいる
右となりの男から盃がまわってきた
武骨なてのひらから盃は私に移る
私はのみほす
つがれるまゝに盃をあけた
そして膳におろすこともなく
左の男にまわした
見知らぬ男であった
私はおうように足を組んでいる
死者にも生者にも
かかりあいのないとむらいの席であった
たびたびに盃は私を通過した